

リルケとカフカ（Ⅰ）

序説—リルケとカフカは出会ったか？（前篇）

河 中 正 彦

序章 はじめに

[0-1]

二十世紀のドイツ文学を代表する二人の詩人、リルケとカフカは、ともに十九世紀末のプラハに生まれた。リルケは1875年、カフカは1883年の生まれだから、リルケの方が8才ほど年長ということになる。この年令差は物理的には僅かなようにみえるが、世紀末から今世紀の初葉にかけて、自然主義、印象主義、新ローマン主義、ユーゲント・シュティール、表現主義と、めまぐるしく芸術様式の変転する過渡期にあっては、この年令のひらきは決して無視できない重みをもっていた。例えばマックス・プロートは、この頃のプラハ文学を、フーゴー・ザールス（1866-1929）の世代、リルケの初期やパウル・レップン（1878-1945）の世代、そしてカフカやプロート（1884-1968）及びフランツ・ヴェルフエル（1890-1945）の三つの世代に分けていて、ほぼ十年刻みで変ってゆく文学的感受性を跡づけている¹⁾。

第二次大戦後はとくに、カフカを論じたものの中にリルケの名が、リルケを論じたものの中にはカフカの名が見出されないことがむしろ珍らしい程、この二人の詩人は並び称されながら、しかしまたこの二人について詳細な比較がなされなかった主な理由は、ひとつにはこれらの文学世代の間に横たわる断層の問題でもあった。事実ヴィリー・ハースは、次のように述べている。

◀だが我々は皆、我々の世代全体がリルケと接点を全然持たなかったのは真実である。リルケは私と同じくプラハの出身であり、彼は私より一世代年上である。

Die Entstehung dieser Abhandlung verdanke ich der Alexander-von-Humboldt-Stiftung, die mir den Studienaufenthalt vom 1. Mai 1984 bis 31. Dezember 1985 ermöglichte.

しかしヴェルフェル、カフカ、マックス・ブロートの世代にとってリルケは、既に私がはっきりさせたように存在しないも同然だった。というのは、リルケが生きていなかったとしても、彼らの作品は全くあの通りだったろう、ということだ。リルケの作品と人物の全体になにか反感を起させるものがあった。それは貴族のスノビズムであった。≫²⁾これは世代間の烈しい断層を語る証言である。リルケに対してハースほどの反感を抱いていないブロートにしてからが、たった一度彼を遠くからみただけだった。リルケが「コンコルディア」の鏡の間で、彼の『新詩集』から、パリのリュクサンブール公園を歌った「メリーゴーラウンド」³⁾を朗読したときのことである⁴⁾。

リルケとカフカの比較を妨げているのは、必ずしも単に世代間の断層だけではなかった。リルケがプラハで過ごしたのは実際にはかなり短い期間であった。彼は1886年11才のとき、ザンクト・ベルテンの陸軍幼年学校に入学し、三年後に卒業、続いて入学したメーリッシュ・ヴァイスキルヒェン陸軍実科高等学校を翌年1891年6月に退学するまでの四年間はプラハにいなかったし、次の一年もリンツの商業学校で過ごし、退学している。従ってリルケが精神的自覚をもってプラハで活動したのは、1892年5月から96年9月にミュンヘンに赴くまでの正味四年間であった。これはカフカが9才から13才のときに当たっている。この頃彼らが偶然に街上で出くわしたとしても、一方が他方をリルケ、カフカと認めることはありえなかった。では彼らは実際に一度も出あったことはないのであろうか？もし彼らが生涯にただ一度出会ったとすれば、それは1916年11月10日のミュンヘンで、であった。彼らが実際に会ったかどうかは、両詩人の伝記上最もミステリーじみた一頁であり、諸説粉々いまだに解決をみぬまま持ちこされている難問なのである。臨場感をもって追求するために、カフカがミュンヘンに赴いた経緯から詳しく跡づけていこうと思う。

第I章 カフカとリルケは出会ったか？

【I-1】 カフカ、ミュンヘンへ

1916年9月中旬のある日、多分14日に、カフカのもとに一通の手紙が舞い込んできた。ミュンヘンで画廊〈新しい芸術〉を営むハンス・ゴルツ（Hans Goltz, Briennerstraße 8）⁵⁾が、〈新しい文学のための夕べ〉という一連の自作朗読会を企画し、カフカを招待したのであった。

クレー、マルク、ココシュカをはじめ、カンディンスキー、フアイニンガーなどの絵を主に扱っていたこの画商は、新しく企画した展示（即売？）会の呼びものとして、それと対をなす新人作家の朗読会を思いついたに違いない。彼が取り引きした画家たちは、一様に、古い写実主義の模写に飽き足らず、セザンヌ、ゴッホ、ゴーガン、さらにはムンクやホドラーの末裔をもって自ら認じ、新しい精神的現実の表現をめざしていたミュンヘンの新分離派の画家たちだったから、朗読に招かれる作家たちもそれぞれに相応しく、新しい精神の体現者でなければならなかった。十指に及ぶ顔ぶれのうちには、マックス・プロート、ラスカー＝シューラー、ベッヒャー、ドイプラーなどの名がみられる⁶⁾。

この招待状が、カフカにとってうれしくないはずはなかった。ミュンヘンから9月12日付で出された手紙は多分届くのに二日は要したと思われるが、すでに15日にカフカはフェリーツェにこの事件について書き送っている。

《もうひとつ、最近ばかりは〈新しい文学のための夕べ〉というシリーズで、ミュンヘンでの朗読会に招待されました。悪い気はしません。喜んで朗読しますし、ひょっとするとあなたも（10月6日か、11日に）そこにいらっしゃれるかも知れませんね。しかし旅券を取る難しさは、そのような目的のためならひょっとして克服できないものではないにしても、ぼくの精力と時間にとっては大きすぎるし、だから多分断らざるをえないでしょう。大変残念です。ぼくはヴォルフエンシュタインと一緒にある夕方朗読することになっていたのですがね。》⁷⁾

第一次大戦のさなかのことである。ドイツとオーストリアは同盟国であるとはいえ、やはり両国間の旅券をとるのはかなり骨の折れることであった⁸⁾。行きたいのは山々だ。が、手続きが面倒すぎる。朗読会に招かれたという荣誉と、その上にミュンヘンでフェリーツェに会えるという楽しみを加えても、気持は消極的に傾いていた。行く気もさしてないのに、フェリーツェにこんなに詳しく報告しているのは、余程うれしかったのだろう。1916年9月といえば、カフカはまだ薄い本を3冊、『観察』1913年。『火夫』1913年。『変身』1915年。）出しただけであり、すでに20冊以上もの本を出版していたプロートに比べて知名度は比べものにならぬ程低かった⁹⁾。外国の未知の人から作家として認められたことは、彼にとって悪い気のすることではなかった。

フェリーツェへの言葉の、あまり行く気のなさそうな内容とは裏腹に、カフカは翌16日にはプラハの警察本部に赴いて旅券の申請をしている。ヨーハン・パウアーによって発掘された申請書の全文は¹⁰⁾、すでに邦訳もあるので¹¹⁾、割愛す

るが、当時旅券の申請がかなり面倒なものだったことを示している。カフカは添付書類として、ゴルツの手紙と朗読会のパンフレット、及び市民権証明書を添え、さらに兵役検査を受け適格と判定されたが、国民軍勤務から無期限で解除されている旨を記入している。彼はこの申請の際、旅券がもらえる可能性を打診したのだろうか、三日後の19日にはフェリーツェに、「やはりぼくはひょっとすると行けるかもしれません」と伝えている。だが同時に、彼にとっていささかうれしくないこともあった。というのは、ミュンヘンからの招待には、プロートが一役買っていることが解ったのだ。未知の人から認められたと信じていたカフカの心は少なからず傷ついた。「今日知ったところでは、プロートがこの招待をあっせんしたのだそうです。行こうという私の気持は、その分だけ殺がれました」¹²⁾しかしミュンヘンでフェリーツェに会うという魅力は断念できない。朗読会に出席するためではなく、「5時間ほどぼくと会うために」来て欲しい、と彼女に頼んでいる¹²⁾。

所でもう一通の手紙がミュンヘンから届いて、朗読会の日どりの変更が知らされた。22日付の手紙には、10月6日か、11日の予定だったのを、11月に延期する旨が告げられていたので、カフカは9月25日に再度総督府に足を運んで、旅券の発行を正確な日付の解るまで当分未決のままにして欲しい、と請願した¹³⁾。

カフカがこの延期をフェリーツェに知らせたのは26日付の手紙である¹⁴⁾。日どりはなかなか決まらず、9月30日の手紙でもまだ未定¹⁵⁾、10月2日の手紙でようやく、11月10日の予定に落ちついたことを知らせた¹⁶⁾。

この日は金曜日で、カフカとフェリーツェには誠に好都合であった。というのも、カフカはこの旅行に二日しか休暇がもらえなかったもので、もし週末がはさめなければ、10日に出発してその夜朗読、次の日には早朝七時に帰りの汽車に乗るというトンボ返りの旅程を強いられるところだった¹⁷⁾。しかしこの日が金曜だったので、次の土曜は二人でゆっくりとミュンヘンの休日を楽しみ、次の日曜を旅行日にあてる予定が組めたのである¹⁸⁾。

出し物の決ったのは10月10日頃、フェリーツェに、あなたの知らない物語、『流刑地にて』を読むでしょう、と知らせている¹⁹⁾。この作品はすでに二年前、1914年10月4日から18日にかけて書きあげられて、筐底に眠っていた²⁰⁾。1916年になってクルト・ヴォルフ書店から、『判決』・『変身』とともに『罰』というタイトルで出版したいという話もちあがったものの²¹⁾、この企画はたちまち反古となり²²⁾、その代わりに『判決』と『流刑地にて』を一冊にしてという案が出される

が、カフカはこれを忌避した²³⁾。カフカによれば、この二つの作品は『変身』というクッションなしには、「忌むべき連関」が生まれる恐れがあり²⁴⁾、彼はこれを避けたかったのである。

クルト・ヴォルフとカフカのこの年の交信には、相互の思惑と誤解が絡みあっていて、簡単に述べることは難しいが²⁵⁾、結局カフカにとって最も緊急だったのは、『判決』の出版であり、『流刑地にて』の出版は、1919年10月まで持ち越された。従ってミュンヘンの朗読会の時点では、この作品はまだ出版されていなかった。これはリルケとカフカの出会いの可能性を考える際、重要なファクターとなる。

さてカフカは、フェリーツェにミュンヘンで『流刑地にて』を朗読すると知らせた翌日に、クルト・ヴォルフに次のように書き送っている。

◀この物語（注一『流刑地にて』）は、「最後の審判の日」²⁶⁾には入れられないとおっしゃるのには、私は全く同意見です。勿論ゴルツの講演ホールの方にもはいらない方がいいのですが、私はこのホールで11月にこの話を朗読するつもりですし、また朗読することを望んでもいます。▶²⁷⁾

カフカにとって、クルト・ヴォルフから出版を拒絶されたのは、このケースが初めてであり、ウンゼルトはここに「傷ついたイロニー」が読みとれるという²⁸⁾。当分の間出版の見込みのなくなったこの作品を、カフカはせめて朗読という形ででも公表したかった。そしてまたこの作品は、未発表で完結したものとしては当時唯一のものだったから、選択の余地は事実上ないに等しかったのである。

カフカのミュンヘンへの旅はまだまだ平担ではなかった。ゴルツから、朗読会は11月10日の代わりに、17日になるかもしれないという便りが届いたり²⁹⁾、マックス・プロートが休暇がもらえずに同行を断念したり³⁰⁾、今度はフェリーツェがミュンヘンに行かないと駄々をこねたり³¹⁾、戦時下のこととして、彼の作品がミュンヘンで官憲の検閲を通らない可能性があったりした³²⁾。

しかし結局はプロートの件以外はすべて落ち着し、カフカは予定どおりプラハを朝8時頃出発、1時頃ベルリンから来たフェリーツェとヴィーザウの辺りで合流し³³⁾、車中で語らいながら、夕方6時24分にミュンヘンに到着した。到着から朗読の始まる8時までを、カフカがどう過ごしたかは明らかではないが、推理することはできる。手元にある1925年のミュンヘンの旅行案内書グリーンペンに依れば（1916年当時とさほど大きな違いはないと仮定して）、多分カフカは駅頭に降り

立った後、シュッツェン通りを左に折れ、ノルネン・ブルンネンの脇を通過してレンバッハ広場を右に折れ、プファントハウス通りを抜け、プロメナーデ広場19にあるホテル、バイエリッシャー・ホーフでいったん旅装を解いただろう^{34a)}。

駅から約800米の所にあるこのホテルは、当時ミュンヘン最大のホテルで、部屋数300、ベッド数450を数え、毎日コンサートの催される豪華さを誇っていた。遠来の客にゴルツは礼を尽したのであろう。その上ここから朗読会場の画廊ゴルツまでは、約400米の距離なのだが、これもゴルツの配慮であったと思われる。ホテルで一息入れたカフカは、プロメナーデ広場を左折し、プロメナーデ通りを北上、ザルヴァートア広場をぬけて、有名なカフェー・ルイットポルトと同じ番地にある画廊ゴルツについていた^{34b)}、と考えられる。

【I-2】『流刑地にて』の朗読（1916-11-10）

カフカの朗読は、この連続朗読会の第5回目に当たっていた。第一回が、ザロモ・フリートレンダー（9月8日）、エルゼ・ラスカー＝シューラー（9月26日）が第二回、続いて第三回がアルフレート・ヴォルフエンシュタイン（10月10日）、第四回が、テオドーア・ドイプラー（10月27日）³⁵⁾、そのあとを受けてカフカは、未発表の自作の朗読家としてミュンヘンに登場した。そしてこの夜の朗読は結局、プラハ以外でなされた唯一の公開朗読会となった³⁶⁾。後にカフカはこの朗読を、「壮大な失敗」と総括しているが、確かに成功とは呼び難いものであった。

会場は当時書店も兼ねていたゴルツ画廊の二階で行なわれた³⁸⁾。50人分の座席はほぼ埋まっていた。講演ホールの壁は、リヒャルト・ゼーヴァルトの油絵、水彩画、エッチングなどで飾られ、さらにヴラマンク、ヴァン・ドンゲン、アウグスティ・ヘルビンの絵が画廊を飾り、ミリー・シュテーター、ヘルマン・ガブリエル、エリー・ナーデルマンの彫刻が展示されていたという³⁹⁾。

一週間まえの11月30日付の『ミュンヘン・アウグスブルク夕刊新聞』には、次のような広告が出ていた。

◀新しい文学のための夕べ。第5の夕べは、11月10日、金曜日、ブリエンナー通り8番地、芸術サロン・ハンス・ゴルツで行なわれる。フランツ・カフカが第一部ではマックス・プロートの詩を、第二部では彼じしんの未刊の物語をよむ予定。切符は1、2、4、5、10マルク、ハンス・ゴルツ書店にて。▶⁴⁰⁾

さらに3日と9日には『ミュンヘン最新情報』に、5日と9日には『ミュンヘ

ン新聞』に告示が載っている⁴¹⁾。この朗読会のシリーズが、ミュンヘンの文学生活で傑出したランクを占めていたというウンゼルトの言葉もあながち誇張とはいえないだろう⁴²⁾。

ほぼ満席に近い聴衆のうちには、抒情詩人ゴットフリート・ケルヴェル、スイスの筆跡学者で作家のマックス・プルファー、リルケ伝の著者でもある作家のオイゲン・モントが混っていた⁴³⁾。もしかするとさらにリルケも同席していたのかもしれない。

マックス・プルファーの回想によれば、会場の照明は悪く、暖房は効いていなかった。カフカは、朗読のために舞台ばなに置かれた机に座って、青白い影のように見えた。それはまるで自分の出現をきまり悪がって、そのバツの悪さを拭い切れないかのようにであった⁴⁴⁾。

カフカはまず最初15分ほど⁴⁵⁾、参加できなかったプロートの詩『約束の地』から代読し⁴⁶⁾、やがて『流刑地にて』に移っていった。(プロートの詩集は、翌年クルト・ヴォルフから出版された⁴⁷⁾。またカフカは律気にも、プロートに朗読の謝礼の一部70クローネを渡したという⁴⁸⁾。)

カフカはそこに居あわせたケルヴェルに、プラハに帰ってからの手紙で、「かの地で私は、私の汚い話（注一『流刑地にて』）を、全く無感動の状態で読みました。火のない暖炉でもあれ以上に冷たくはありえません。」と回想しているが、会場のほうはそれ所ではなかったようである。再びプルファーの回想にもどると、
《彼の話しぶりを私は忘れてしまった。最初の言葉とともに、味のしない血の匂いが拡がりはじめ、奇妙な気のぬけた淡い味が私の唇に感じられた。彼の声はなにか詫びるように聞こえたかもしれない、しかし彼の形象の方は深淵の苦悩に満ちた氷の針となって、メスの鋭さで私のなかに喰い込んできた。

拷問と拷問具が、その執行者の押し殺した恍惚の言葉で述べられるだけでなく、聴衆も地獄の責苦に引きずり込まれ、小刻みに動く拷問のベットの上に犠牲者として横たわるのである。言葉が新しく発せられるたびに、新しい刺となって聴衆の背中に判決文がじっくりと彫りこまれてゆくのだった。

ものの落ちるにぶい音がした。ホールにざわめきが起り、気絶した婦人が運び出された。そのあいだにも処刑の描写はとぎれなかった。再び彼の言葉は何人かの気絶者を出した。聴衆の男女の列がまばらになり始めた。最後の最後にも、詩人のヴィジョンに圧倒されるまえに、何人かが逃げだした。話された言葉がこれ程の効果をもったのを、私はかつて見たことがない。私は最後までいた、数秒心

臓が止った。しかし私は居残って、執行者が自らすすんで自分の精巧な拷問具の犠牲となり、突き刺された屍体のために処刑機械が瓦解するさまを聞いた。文学の正義は十分に満たされ、執行者は死んだ。≫⁴⁹⁾

朗読の際の鬼気迫る雰囲気をつルファーはこう伝えている。1954年、折からのカフカブームのさなかに出版されたこの回想は、幾分誇張の気味がないではない。しかし会場にいなかったプロートがこの回想のことをまっこうから否定しているのもまた奇妙な話である。

プロートはカフカがミュンヘンから帰ったときプラハの駅に出迎えたが、そのときカフカは朗読会のことを詳しく話したという⁵⁰⁾。しかし気絶者がでたなどとカフカは言わなかった。プロートの推測では、カフカは自分を貶しめることならなんでも強調するのが常であったから、もしそんなことが実際にあったら、「三人の気絶者、これがぼくの悲しい成功なんだよ。」といった筈だというのである。

オイゲン・モントの回想は、つルファーのものに比べてはるかに自然であり、信頼できるようにも思われるが、こちらはこちらで記憶があいまいな所があり、必ずしも全面的に頼れるわけではない。(例えば、カフカが朗読したのは、『判決』となっていて、多分本人以外の手によって『流刑地にて』と修正されている⁵¹⁾。)モントの回想は次のようになっている。

≪私が朗読を聞いた多くの作家たちのなかで、カフカは落ち着いた、わざとらしくない、ほとんど謙虚なくらい節度のある態度で、つまり極めて自然な態度で目立った。それは単に物腰のみでなく、服装などにも現われていた。彼はもっとも善い意味で調律がとれていた。

彼が朗読した忌憚のない物語『流刑地にて』は、その即物性によって魅惑的であると同時に戦慄的であり、彼の愛読されている本、『火夫』で我々になじみのこの新しい人の話し方は、我々の時代の新しい人間にあまりにも命中したので、いろんな女性たちが立上って、会場を出ていった。≫⁵²⁾

つルファーの筆には事態をドラマタイズしたような傾向が顕著なので、モントの方があるいは真相に近かったのかもしれない。

さてリルケとカフカがこの会場で出会ったかを推理するまえに、カフカの朗読を三つの新聞が採りあげた批評と、朗読が済んだあとでカフカをかこんで詩人たちがレストランに行った模様と言及しておこう。

11月11日、つまり翌日の『ミュンヘン最新情報』は、ユリウス・コンスタンティン・フォン・ヘスリンの批評を掲げた。彼はプロートの詩をかなり色褪せた形象と評し、カフカの作品は遅疑なく「グロテスク」と呼び、芸術的感銘を与えるためには素材をもっと短く切りつめるべきだ、と説教を垂れている⁵³⁾。要するに、素材そのものに反感を抱いた、つまらない批評であった。

翌日12日に『ミュンヘン新聞』に載ったハンス・バイルハック博士の批評は、三紙のうちで最も深い理解を示したものであった。彼はカフカの並々ならぬ叙事詩の形式上の才能を認めたくえて、この物語が『変身』の線上にあることを確認し、この方法を自然主義とは呼ばまいと述べている。カフカの世界は、超現実的であると同時に、恐ろしい地下の世界であって、カフカは、「恐怖の惑溺者」である。さらに評者は、殺人的な時代を象徴的に描こうとすれば、文学は「政治的」になってしまうが、しかしこの作品は美的な法則を踏みこえてはいない、と指摘した⁵⁴⁾。この最後の点は、カフカがクルト・ヴォルフに宛てて、この作品を弁護しながら、この物語がやり切れないのは、単にこの物語のみならず、彼らの一般的な時代がやり切れないからだ、と述べたことを思い併わせると⁵⁵⁾、的確だったといえる。

13日に『ミュンヘン・アウグスブルク新聞』に掲載されたS.の批評は⁵⁶⁾、カフカによれば、「最初のよりも好意的なもの」であったが、「根本的な見方では一致しており」、それゆえ「好意的な感情が、事柄全体の事実上壮大な失敗をさらに一層強めている」ものであった⁵⁷⁾。S.は、カフカの朗読につきまとう「欠陥」をあげつらい、作品については、一応注目に値する文学的成果としながらも、朗読には長すぎ、ひきつける力に乏しいと裁断した。彼はカフカの作品の本質を、新興文化層が出くわす誤解とそれに対する復讐劇と解したため、作品を傾向文学とみなし、舞台でならうまくいくかもしれないが、朗読には不向きであると判断したのである。S.はバイルハックと同じように作品を時代に相渉らせようとしているが、内容には雲泥の差があった。

カフカは第一と第三の批評しか、不幸にも入手しなかった。バイルハックの批評を知っていたら、幾分慰められたかも知れなかったが、二つの批評に厭気がさして、「もっと他の批評を手に入れようと努め」なかった⁵⁸⁾。「ともかく僕はこれらの判断の正当性を、ほとんど実際にその通りであると認めざるをえません。」⁵⁸⁾

このように散々な悪評を蒙ったカフカの朗読家としてのミュンヘンでのデビューであったが、朗読会が終わったあとでの詩人たちの彼に対する接し方は決し

て冷淡なものではなかった。終了後、参加者のうち七人が一緒にレストランに行った。カフカ、ベルリンから来た彼の婚約者フェリーツェ・パウアー、ゲルハルト・ウーカマ・クノープ夫人（リルケは夭逝したその愛娘ヴェーラに『オルフォイスへのソネット』を献じている）、ケルヴェル、プルファー、モント、そして音楽学者のレーマンである⁵⁹）。このときリルケが居あわせたこおとは、まず考えられない。このような狭いサークルでリルケのような著名人がいて、しかも言及されないはずがないから。

モントは偶然カフカのとなり座ることになった。カフカは、「私は私の小さな汚い話を読むべきでなかったかもしれません。」と言ったという。モントは、そんなことはないと言おうとした。それから彼らはリルケのことを話した（これによっても明らかにリルケはここに居なかったことが解る）が、その際カフカは聴き手に廻った。

しばらくするとマックス・プルファーがモントの後ろに歩み寄って「失礼」といった。モントとは自分が道を塞いでいるのだと思って、立ちあがり道を開けた。するとプルファーはあっさりとモントの席を奪って、彼に幅の広い背中をむけてしまい、モントの友人ケルヴェルが抗議しても聞きながし、カフカを独占してしまった⁶⁰）。

モントのプルファーに対する恨みは深く、プルファーは好意的には描かれていない。面の皮の厚い、雄牛のようなプルファーに対し、カフカはその対極として描かれている。モントはプルファーの突撃的な接近に巧みに身を処したカフカの様子を浮びあがらせ、彼の表情に困惑の微笑さえ読みとっているが、皮肉にもカフカの方はケルヴェル宛の手紙で「しばしの間プルファーが私を魅惑した」⁶¹と告げている。他人が自分を取り囲んで奪い合う様子を見るのは、悪い気のしないものであったということ以上に、カフカの資質として対極的なものに魅了される傾向がここで大きく作用しているのかも知れない。

扱て我々はリルケとカフカが、朗読の済んだあと、レストランでの会食の際会った可能性は全くないことを確認した。では一体カフカとリルケが会ったのではないかという推測はどこから生まれるのだろうか？それはカフカが1916年12月7日にフェリーツェに宛てて書いた手紙の一節に懸っている。

[I-3] リルケとカフカは出会ったか？

◀Übrigens habe ich mich in Prag auch an Rilkes Worte erinnert. Nach etwas sehr Liebenswertem über den Heizer meinte er, weder in Verwandlung noch in Strafkolonie sei diese Konsequenz wie dort erreicht. Die Bemerkung ist nicht ohne weiteres verständlich, aber einsichtsvoll.▶

(大意。ところでほくはプラハでリルケの言葉も思い出しました。『火夫』について大変好意的な言葉のあとで、彼は『変身』でも『流刑地にて』でも、『火夫』においてほどの一貫性は達成されていない、という意見でした。この評言は直ちに解るといえるものではないのですが、洞察に富んでいます。)⁶²⁾

カフカの『フェリーツェへの手紙』の編纂者エーリヒ・ヘラーとユルゲン・ボルンはこの箇所について次のように注釈を加えた。

◀リルケとカフカは互いに多分会わなかった。カフカは自分の作品についてのリルケの判断を多分オイゲン・モントを通じて知ったのだろう。当時まだ出版されていなかった物語『流刑地にて』をリルケがどうして知っていたかは突きとめられない。察するところリルケはそれを原稿でよんだのだろう——それは9月30日にはすでにミュンヘンについていた——そしてオイゲン・モントとそれについて話したのだろう。▶⁶³⁾

この推測はこの問題にはじめて言及したものとしては強い説得力をもっていた。『リルケ年代記』のシュナックもこれに依拠していると考えられる⁶⁴⁾。なぜならモントの回想にはっきり述べられている通り、朗読後のレストランでの会食の際、モントとカフカはリルケについて語ったのだから。

しかしこの多分ボルン（ヘラーではなく）の推理には、重大な事実誤認がある。これはカフカの原稿が9月30日にミュンヘンに到着していたという記述である。

カフカは11月3日付のフェリーツェ宛の手紙に「原稿はやっと月曜にあそこに届きましたので」⁶⁵⁾と知らせている。11月10日が金曜にあたることはすでに述べられているから、これから逆算すれば、10月30日にカフカの原稿はミュンヘンに届いたことになる。それをボルンは軽率にも、一ヶ月とりちがえて9月としたのである。ささいなことようだが、この一ヶ月の違いは小さくはない。9月30日に原稿がミュンヘンに届いていれば、リルケが『流刑地にて』を原稿の状態で読む余裕はいくらでもあったかもしれない。しかしすでに述べたようにカフカがミュ

ンヘンで何を朗読するかを決めたのが、10月10日頃のことである。カフカはそれから手書きの原稿をタイプ浄書したはずだから、9月30日にミュンヘンに原稿が届いていたことはまず考えられない。

従って我々はカフカの原稿が10月30日にミュンヘンに到着したという前提のもとに（前提というより事実なのだが）、リルケがカフカの原稿を読んだかどうかを問わねばならない。問題を整理しよう。

第一に、リルケはカフカの原稿を入手して読む時間的なゆとりがあったかどうか？なぜならすでに述べたように、この原稿は官憲の検閲を通過せねばならなかった。そして後に述べるように、その結果はカフカの出発ギリギリまで解らなかつた様子である。このことを仮定した上で、なおかつリルケが原稿の状態で作品を読んだかが、問われねばならない。もしその可能性がないなら、リルケはカフカの朗読会に出席した、そしてカフカと言葉を交したと想定せねばならない。

第二に、リルケは、彼がカフカの原稿を入手して読むという労苦を払うほど熾烈な関心をカフカに対して抱いていたかどうか？カフカは当時まだ全く無名とっていい程であったから、朗読会にゆけば簡単に接することができる作品の原稿を入手して読むというのは、余程の執心がなければできないことである。一体リルケは、カフカの原稿が予めミュンヘンに到着していること、それがどこにあるかということ、どうすれば入手できるかということ、どのようにして知ったのだろうか？

第三に、カフカのフェリーツェ宛の手紙では、リルケがカフカの作品について批評を加えた際の伝達動詞は、meinen が使われている。原文に添えた大意では、予断を許さぬために、「意見である」と中立的な訳をつけておいたのだが、この動詞は勿論「言う、口に出す」という意味にもとれる。つまりリルケがカフカに直接に意見を伝えたことを示唆する標識ともとれる言葉である。事実M・パズリーはこれを論拠にカフカとリルケの出会いを推定している⁶⁶⁾。

第四に、リルケはカフカにかの評言を伝える前に、「火夫について大変好意的なこと」を述べた、という。もしモントを通じてカフカがリルケの意見を聞いたのだったら、なぜこんな前置きが必要だったのだろうか？新作『流刑地にて』

について忌憚のない意見を直接カフカに伝えたからこそ、こんな外交的な前置きが必要だった、のではあるまいか？

第一の論点について立ち入って考えてみると、この可能性は、ポルンが考えているよりはかなり薄いとわねばならない。すでに確認したように、カフカの原稿がミュンヘンについたのは、10月30日の月曜であった。もしその前の土曜の午後にも到着していれば、月曜の朝まで原稿はゴルツのもとに遊んでいたはずだから、ゴルツと面識のあったであろう⁶⁷⁾リルケが、その原稿を入手した可能性はある。しかし主催者のゴルツにとってカフカの原稿が検閲に通るかどうかは火急の件であったはずだから、いかにリルケの乞いとはいえ、一日も早く官憲の検閲に廻す必要の前には、私的な要請は拒絶されねばならなかった筈である。とすれば、ゴルツのもとに原稿が届いてから検閲に廻るまでにリルケが原稿を読みえた可能性はまずないと考えねばならない。問題は検閲を通してゴルツのもとに原稿が戻されてから、当日10日までの多分ごく短い期間にのみその可能性がある。なぜそれが短いかといえば、カフカがフェリーツェに、「ぼくの朗読の唯一の予想される障害は今では、ミュンヘンでの検閲が起す困難だけでしょう」⁶⁸⁾と書いたのが、10月27日のことであり、29日にも、「当局がみとめなければ、ぼくは断らざるをえないでしょう」⁶⁹⁾と伝えている。11月3日にもまだ「それが性質上いかに罪のないものであっても、それが許可されるのは全く想像できません。」⁷⁰⁾と述べている。さらに11月5日になっても、8日か9日に「ぼくらはゆきましよう」か「だめです」と打電して最終的な連絡をとると書き送っているが⁷¹⁾、その場合ネックになっているのは勿論検閲の問題である。電文は残されていないから、断定はできないが、出発ギリギリまで不明であったか、不明のまま出発した可能性さえある。(尤も不明のままでは、越境が不可能であったかもしれない。)しかしどんなに早く見積っても11月3日以前に許可がおりた可能性はなく⁷²⁾、従って原稿がゴルツのもとにあったのは長くて一週間、短かければ数日以下である。

では一体リルケはこの短期間にカフカの原稿を入手してまで読む程の熾烈な関心を彼に寄せていただろうか？リルケはクルト・ヴォルフから出ていた叢書『最後の審判の日』を、1914年の初めに全巻一括して入手したというから⁷³⁾、『火夫』の方はこの時彼の視圏に入った。『変身』は、リルケがエッセイ『人形』を発表した月刊誌『デイ・ヴァイセン・プレッター』(1914年3月号、第7号)の翌年10号に掲載され、リルケはそれを女流画家ルー・アルベール・ラザールに朗読して聞かせたという。

《彼は時折、未知の人から受取ったばかりの注目すべき手紙を私にみせたり、読んだばかりの感銘を受けた詩、とりわけオーストリーの詩人たちの独特のサークルの詩をみせたりするために私を呼びました。その中には、病んだ暗い主調をもった天逝詩人トラークルや、わけても彼が『変身』を朗読してくれたカフカのようなプラハの人たちがいました。》⁷⁴⁾

『変身』に関してはもう一つ証言があって、ルドルフ・ヒルシュがユルゲン・ボルンに伝えた所によれば、トゥルン・ウント・タクシス侯爵夫人の未刊のメモには次のような個所が見いだされるという。

《彼はどこかで聞いたか読んだかした滑稽な変身物語の話をした。朝めがさめると、自分が巨きな甲虫になっているのを発見する出張販売員。読者はみずから甲虫になってしまい、甲虫の奇妙なちょっとした感情や紛糾にも一緒に巻き込まれてしまう。》⁷⁵⁾

リルケの『変身』の読み方は、カフカの独特のパースペクティヴの効果をしっかりと捉えていて、彼の関心の深さを物語っている。従ってリルケが『流刑地にて』の草稿を読みたいという欲求を抱いていたことは充分にありうるのだ。しかしではなぜリルケは、入手しがたい草稿を読むという程熾烈な関心を抱きながら、カフカの朗読会には出席しなかったのか？これがボルンの推理で苦しい点である。

リルケのカフカに対する関心はこれとどだえるところか、カフカの短編集『田舎医者』（1919）を読むに及んで再び燃え上った。クルト・ヴォルフは1922年1月30日にミュンヘンからミュゾットのリルケのもとにこの本を送った⁷⁶⁾。他の作家の4冊の本とともにこの短編集を受け取ったリルケは、2月17日にクルト・ヴォルフに礼状をしたためている。

《私はこれらのすてきな本を次の読書時間のためにとっておきました。ただカフカの本だけはもう昨夜、他の仕事の途中で先に取り上げました。私はこの作家のものを一行たりとも、最も風変わりなものに到るまで私に関係のあるものか、私を瞠目させるものと思わずに読んだことはありません。あなたが親切にも私に知らせて下さったからには、私は望んでもよいでしょうから、どうかフランツ・カフカのものであなたの所から出版されるものすべてに対してつねに私の予約を受けつけておいて下さい。そう請け合ってよいなら、私は彼の最悪の読者ではありません。》⁷⁷⁾

他の作家（ドーソン、ベルガー、ブルスト）をさしおいて、しかも彼が「精神

(オルカーン)の「颯風」』と呼んだ創作の絶頂期に⁷⁸⁾、従って多分外からの影響よりも、自分の中から汲み上げることに専念していた時期に、カフカの作品を「わがこと」のように読みえたということは並々ならぬことであった。

「私は彼の最悪の読者ではありません」という曲りくどい二重否定のなかにリルケのカフカへ打ちこみ方と理解への自信の程がうかがわれる。この箇所はよく知られていて、すでに諸家が引用しているが、もうひとつ、まだあまり知られていないカフカへの美しい讃辞をリルケは書き残している。それは1925年、カフカの死後一年ほどしてから、ナンニー・ヴンダーリー＝フォルカルト夫人に宛てた手紙で、原文はフランス語で書かれている。

《そしてあなたはカフカをまだ高く買ってはおられないのではないかと推察します。彼にはなにか手を触れられたことがない、といった所があって、とても斬新です。私は彼の短編の一つを読みました。非凡なものです。この人はあの世でどう扱われているのでしょうか？彼はあつという間にこの仮初めの永遠(＝この世)を駆けぬけて、天使たちを余りにもなじみ深い特徴で驚ろかせているに違いありません。この傑出した文学者はきっと文学を厭い切っていたのですが、卑俗で些細なできごとのどの一つからでも、眼にみえぬものの一雫をしばりとる技術を知っていたのです。下らない卑しいものを採り上げて、それでもって彼は空間を造りだします。天空と同じくらい空虚であると共に、活気を吹き込む空間をです。これを見るやいなや、もうそれを呼吸することになるのです。》⁷⁹⁾

さすがは天使学の大家リルケならではの讃辞である。リルケは、いにしへの愛の女性ルイズ・ラベ等に対してならいざ知らず、同時代の詩人に対して決してこれほど深い洞察にみちた共感を示したことはなかった。のみならず、これはカフカについて呈されたオマージュのうち、まちががなく最も美しいもののひとつである。

リルケにとってカフカのような夭逝者は、「いぶかしいまでに」英雄に近い存在であったし⁸⁰⁾、両者はまた、勿論懸隔を前提とした上で、(愛の女性たちと並んで)人間たちのうちで最も天使たちに近い存在であるといつて大過ないであろう。だからこそリルケは、この世を「駆けぬけていった」カフカが(「英雄は愛の宿りのどの一つにもとどまることなく駆けぬけてゆく」⁸¹⁾)、あの世で天使たちを、彼があまりにも天使によく似た特徴を備えているので、驚かせているにちがいない、とまで言ったのである。

文学を厭った文学者、卑俗なものから眼にみえぬものの一雫をしばりとる、下

らないものから空間をつくりだす、見るやいなやもうそれを呼吸してしまう空間、——こういったリルケ独特のイデオムで、リルケはほとんど自分の文学を語るのと同じ語り口でカフカの本質をえぐっている。

我々は、例えば、あの余りにも有名なフレヴィッチ宛の手紙の一節を想い出すことができる。

◀変容？そうです。なぜならこの仮そめのはかない大地を、その本質が私たちの内部で「眼にみえぬもの」となって再び蘇るほどにも深く、苦しみながら、情熱的に私たちに刻印することこそ、私たちの課題なのですから。私たちは眼にみえるものの蜜を、眼にみえない世界にある大きな黄金の蜜箱に集めるために、狂ったように漁っているのです。▶⁸²⁾

明らかにリルケはカフカにこの変容の過程を成就した詩人をみている。そしてリルケにとって、『悲歌』の天使は、「我々がなしとげる眼にみえるものから眼にみえぬものへの変容がすでに成就されているように思われる被造物」⁸³⁾なのである。本来的にはこの意味でリルケはカフカを天使になぞらえている。リルケは、家、橋、泉、門、水差し、果樹、窓などの身近なものを謳った。しかしカフカはもっと卑近な対象（例えば、『変身』におけるステッキ、ポロ布、古新聞などが持つ喚起力、コノテーション機能⁸⁴⁾のポテンシャルの高さに注目されてたい。）から作品を、リルケの用語でいえば、「空間」を造りだした。ここでいう空間とは、諦念を媒介項として、「所有」から「連関」へと変容された世界、即ち「世界内面空間」のことに他ならない。（諦念については、「おまえの諦念のなかへと形成されてはじめて、樹はほんとうに樹になるのだ。」⁸⁵⁾を参照。所有と連関については、イルゼ・ヤール宛の書簡の「所有の代わりに、ひとは連関を学びます。」⁸⁶⁾を参照。）

この空間は、所有と連関が相互に交換される空間であるため、その交換性は呼吸によって比喻される。

◀呼吸よ、目にみえぬ詩よ！

絶えず自分の存在のために

純粹に交換された世界空間。▶⁸⁷⁾

リルケが、「天空と同じくらい空虚であると共に、活気を吹きこむ空間」、「見るやいなや、もうそれを呼吸することになる空間」とカフカの文学空間を呼ぶとき、当然ながらこの『オルフォイスへのソネット』の一節が踏まえられている。

以上の粗描からでもすでに明らかなように、リルケは自分の文学を語るイデ

オムの精髓を尽してカフカの文学を特徴づけている。従ってリルケがカフカの文学への熾烈な関心を抱いたことは疑いえない。但しリルケのカフカへの関心には多分二つの段階があり、1922年2月に短編集『田舎医者』を読んでからは、以前とは比べものにならない程カフカ認識が深化されたと見て間違いない。1914年から22年にかけてのリルケは、カフカに着目してはいたであろうが、朗読会の直前にタイプ原稿の状態で読まずにいられない程、矢も楯もたまらぬ飢渴をカフカの文学に対して抱いていたかどうかは、明らかでない。もしリルケの飢えがそれ程のものならば、なぜリルケがカフカの朗読会に行かなかったのかは説明が難しいのではあるまいか？しかしまだ私たちは断定を避けよう。

扱て私たちは自ら立てた四つの問題のうち最初の二つを検討しただけに終わった。それによれば、第一にリルケがカフカの原稿を入手して読む時間的なゆとりは、全くないではなかったが、10月30日に原稿がミュンヘンに届いてから当局の検閲をうけたあと、朗読会までの時間はそう長くはないこと、第二にリルケは朗読会の以前からすでにカフカの作品を知っていたが、原稿を入手してまでよむ程の烈しい興味をもっていたかどうかは不明であること、が明らかとなった。

私たちはまだ多くの検討すべき点を残している。

第一に、11月10日前後のリルケの足跡を、カフカの行動を追った程には詳しく追跡していない。交点を求めるためには、二つの軌跡を等しくたどらねばならないだろう。

第二に、検討し切れなかった二つの問題（第三と第四、P.42参照）を含めて、もう一度総合的に諸家の見解を比較検討し尽くすこと。

第三に、マルコム・パスリーが『リルケとカフカ』で展開した、カフカからリルケへの広汎な影響関係を検討すること。

第四に、カフカとリルケの通時的比較（直接的関係）のみならず、共時的比較が可能になるための問題を洗い出し、素描すること。

以上が今後の課題として残ることになる。

(続)

文 献 と 略 号

A) Primärliteratur

1) Franz Kafka : Gesammelte Werke in Einzelausgaben (Fischer)

Br.=Briefe 1902-1924 (1958)

F.=Briefe an Felice (1967)

2) Rainer Maria Rilke

SW.=Sämtliche Werke (Insel, 1955-1966) Bd. I - VI.

Thurn und Taxis = R. M. Rilke/Marie von Thurn und Taxis : Briefwechsel. II Bde. (Insel, 1986)

Wunderly-Volkart = R. M. Rilke : Briefe an Nanny Wunderly-Volkart. II Bde. (Insel, 1977)

B) Sekundärliteratur (Alphabetisch)

Albert-Lasard = Lou Albert-Lasard : Wege mit Rilke (1952, Fischer Vlg. Fr. a. Main)

Bauer = Johann Bauer (Text)/Isidor Pollak (Fotos) : Kafka und Prag (1971, Belser Vlg. Stuttgart)

Born = Franz Kafka - Kritik u. Rezeption zu seinen Lebzeiten 1912-1924 (1979, Fischer Vlg. Fr. a. Main)

Brod I = Max Brod : Über Franz Kafka (1976, Fischer Tb. 1496)

Brod II = Max Brod : Streiftbares Leben Autobiographie 1884-1968 (1979, Insel Vlg. Fr. a. Main)

Haas = Willy Haas : Die Literarische Welt Erinnerungen (1960, List Tb. 174-175)

Mondt = Eugen Mondt : München-Dachau, ein literarisches Erinnerungsbüchlein. [Typoskript : Stadtbibliothek München, Handschriften-Abteilung. Nachlaß Eugen Mondt] Franz Kafka S. 42-48 Rainer Maria Rilke S. 50-58

Nalewski = Horst Nalewski : R. M. Rilke in sener Zeit (1985, Insel, Leipzig)

Pasley = Malcolm Pasley : Rilke und Kafka. Zur Frage ihrer Beziehungen "Litertur und Kritik" Nr. 24, 3. Jg., 1968 S. 218-225

Pulver = Max Pulver : Erinnerungen an eine europäische Zeit. (Zürich, 1949)

Schnack = Ingeborg Schnack : R. M. Rilke. Chronik seines Lebens und seines Werkes. II Bde. (1975, Insel, Fr. a. Main)

Symposion = Jürgen Born/Ludwig Dietz/Malcolm Pasley/Paul Raabe : Kafka - Symposion (1966, Klaus Wagenbach, Berlin)

Unselnd = Joachim Unselnd : Franz Kafka - Ein Schriftstellerleben (1984 Fischer Tb. 6493)

Wessling = Berndt W. Wessling : Max Brod (1984 Bleicher Tb. Gerlingen)

Wolff = Kurt Wolff : Briefwechsel eines Verlegers 1911-1963 (1980, Fischer Tb. 2248)

註

- | | |
|---|-----------------------------------|
| 1) Brod II S.149 | 13) Bauer S.102-105 及び『手紙』p.167 |
| 2) Haas S.176-177 | 14) F 710 |
| 3) Rilke SW I S.530-531 | 15) F 714 |
| 4) Brod II S.137 | 16) F 715 |
| 5) Brod II S.186 | 17) F 714, F 723, F 735 |
| 6) Born S.117, F699 | 18) F 716 |
| 7) F 699 | 19) F 722 |
| 8) Unselde S.141 | 20) Symposion S.65 |
| 9) Wessling S.125-126 | 21) Br 147 |
| 10) Bauer S.108, S.116 | 22) Br 147-148 |
| 11) 決定版 カフカ全集第9巻『手紙』
p.166~167 | 23) Br 148 |
| 12) F 703 | 24) Br 149 |
| | 25) Unselde S.133 |
| 26) クルト・ヴォルフから出ていた叢書のこと。ちなみにカフカの『火夫』はこのシリーズの第3巻として、『変身』は第22/23巻として出版された。Unselde S.86及びS.107参照のこと。 | |
| 27) Br 151 | 33) F 739 |
| 28) Unselde S.138-139, Br 149参照 | 34a) F 740 |
| 29) F 727 | 34b) Mondt S.42 及びGrieben S.19 |
| 30) F 728, F 735 | 35) Born S.117 及びF 699 |
| 31) F 738 | 36) Brod II S.187 及びUnselde S.142 |
| 32) F 735, 736 | 37) F 744 |
| 38) 書店も兼ねていたことに関しては, Mondt S.42及びNalewski S.169-170, Brod II S.186 | |
| 39) Born S.118 | |
| 40) Brod II S.186 | |
| 41) Born S.117 | |
| 42) Unselde S.141 | |
| 43) Eugen Mondt und Georg Hecht : Rainer Maria Rilke. Leipzig, 1912, 104S. | |
| 44) Max Pulver : Erinnerungen an eine europäische Zeit (Zürich : Orell Füssli, 1954) S.50-57
但し, 引用は, Born S.118から | |
| 45) Julius Konstantion von Hoeßlin in "Münchener Neueste Nachrichten", 1916-11-11 但し, 引用は, Born S.120から | |
| 46) Brod II S.187, Brod I S.140 | 53) Born S.120 |
| 47) Wessling S.126 | 54) Born S.121 |
| 48) Brod II S.187 | 55) Br 150 |
| 49) Pulver 但し, Born S.119に依る。 | 56) Born S.122-123 |
| 50) Brod I S.212 | 57) F 743-744 |
| 51) Mondt S.42 | 58) F 744 |
| 52) Mondt S.42 | 59) Mondt S.42 |

- 60) Mondt S.43
- 61) Br 153
- 62) F 744 ちなみに Rilke のこの評言は、Rilke の書き残したものの中には、どこにも見当らない。
- 63) F 744 脚注参照
- 64) Schnack S.544
- 65) F 739 ちなみに邦訳、決定版カフカ全集のこの箇所の訳は、「原稿は月曜にならないと向うに届きませんから」となっている。これでは、11月6日に原稿がミュンヘンに届いたと誤解されかねない。
- 66) Pasley S.220
- 67) この点は未確認だが、後に述べるように Rilke はゴルツでの朗読会にしばしば出席しており、一面識もなかったとは考えにくい。
- 68) F 735
- 69) F 736
- 70) F 739 カフカの『流刑地にてについては、拙論『自虐の機制』——カフカの流刑地にて——Ⅰ、Ⅱ』参照。(山口文学「独仏文学」第1号1979, 山口大学文学会誌1978年第29卷) カフカの『流刑地にて』は、私見によれば、自虐のメカニズムを描いたものだが、どのような解釈も可能なカフカの作品は、当局の忌諱に触れる可能性もあった。流刑地で執務中に眠りこみ、大尉に鞭で打たれると、その脚にしがみつき、「鞭をすてろ、さもないと喰ってやる」と叫ぶ処刑囚(兵士)が描かれているなど、解釈のいかんによっては、大戦中の当局の逆鱗に触れる恐れもあったのである。
- 71) F 740
- 72) もし3日以前に解っていれば、手紙で知らせても、5日にはカフカに解っていたはずである。電報で知らせれば、その日のうちにつくはずであるから、5日まで検閲の通過が不明であった可能性もある。
- 73) Storck: R. M. Rilke 1875-1975, Ernst Klett, 1975 S.193
- 74) Albert-Lasard S.43 なお Schnack S.484 も参照。
- 75) Born S.185
- 76) Kurt Wolff S.151-2 及び M. Pasley S.219
- 77) Kurt Wolff S.152
- 78) Thurn und Taxis. S.698 1922-2-11
- 79) Briefe an Nanny Wimmerly-Volkart II. Band S.1025 (Nr.419 Muzot, 12.11.1925) なお不明の点を平山豊氏(山口大教養部仏語)に教えていただいた。深謝します。
- 80) 6. Elegie V.20 SW. I, 706
- 81) 高安国世訳。6. Elegie SW. I, 708
- 82) Rilke: Briefe in einem Band. S.898. (1980, Insel)
- 83) an Hulewicz, a.a.O. S.900
- 84) ロラン・バルト: 零度のエクリチュール、付・記号学の原理(1971, みすず書房) p.195 ~201
- 85) SW II. S.168. "Durch den sich Vögel werfen,..."
- 86) R. M. Rilke: Briefe in einem Band. S.820
- 87) SW I. S.751 "Orpheus" II-1.